三真

真実を求め
真実を語り
真実を行う

令和5年度 妻中学校だより
4月号

妻中HP

校長 伊東泰彦

※本年度の学校だよりのタイトルを「三真」としました。命名の思い等については裏面のコラムをご参照ください。

第77回入学式を開催しました！

4月11日（火）、第77回目となる入学式を開催しました。コロナ禍の制限が段階的に解除されてきたこともあり、本年度は西都市長・橋田和美様、教育委員・西村美津様を始め27名の来賓の方々にもご臨席を賜り、一六六名の新入生入学をお祝いすることができました。新入生の皆さんはやや緊張した面持ちでしたが返事や姿勢などはとても立派で、三月まで小学校の最高学年として頑張っていた姿が伝わってきました。代表生徒の誓いの言葉にもありましたが、今回の入学生は、歴史ある妻中学校の最後の卒業生（第79回卒業生）となります。先輩方からの伝統のバトンをしっかりと受け継ぎ、歴史の節目を飾る立派なアンカーに成長して欲しいと期待します。一緒に頑張りましょう！

点呼、入学認定

式辞

誓いの言葉

英語と日本語による歓迎の言葉

市教委告辞、市長祝辞、ＰＴＡ会長祝辞

２本の指を自力でぐっと広げても限界があるが、「別の指」を内側から添えてやると指は更にまだ開く。この自力で開く指が生徒の姿勢、「別の指」が学校の先生の役割。

妻中では、生徒の主体的な活動が展開されています！

始業式・校長講話

始業式の校長講話の際に、代表で登壇していた生徒にいきなりいくつかの質問をしてみました。まったく臆することなく、堂々と内容の深い回答をしてくれる生徒達にとても驚きました。さすが妻中です！次回からは対話をするので楽しみです。

歓迎行事での生徒会役員あいさつ　※この後部活動紹介も行われました！

妻中学校の校訓

真実を求め 中学生本来の理想の姿を目指す

真実を語り 今の自分を知り、あるべき姿・理想を考えていく

真実を行う 理想の自分になるために、日々の実践を行っていく

歓迎行事はＺＯＯＭでも配信

◀▲生徒会が説明で用いたプレゼンシート。校訓が意識されています！

11名の職員が新しく赴任しました！

四月の定期異動等により、新たに11名の職員が赴任しました。伝統ある妻中への赴任ということで当初はやや緊張感もありましたが、生徒たちの元気で溌剌(はつらつ)とした姿に接するうち、次第に気負いがほぐれ、やる気が満ちてきました。どうぞよろしくお願いします。

本校前庭の桜です

校長　**伊東　泰彦**（穂北中より）
事務主幹　**原田義和**（東海中より）
指導教諭　**髙平　佳代**（住吉中より）
教諭　**黒木　千穂**（高鍋東中より）
講師　**芳野　敏生**（宮崎中より）
主事　**田代ひろ子**（宮崎大宮高より）
教頭　**井上成二郎**（東郷学園より）
主幹教諭　**右田　克宏**（本庄中より）
教諭　**長友　綾香**（新規採用）
講師　**野崎　大史**（三股中より）
講師　**岡田冨美子**

※「広報さいと」にも掲載される予定です。

校長　伊東　泰彦

本校の第35回卒業生です。教職人生の最終段階でようやく母校に勤務することができ大変嬉しく思っております。生徒たちと一緒に様々なことに挑戦していきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

教頭　井上成二郎

妻中には、平成19年度から平成23年度までの５年間お世話になりました。今回、再び妻中で勤務できることを嬉しく思います。子どもたちのために全力を尽くします。どうぞよろしくお願いいたします。

事務主幹　原田義和（東海中より）

事務の原田義和と申します。

私の役割は、西都・児湯地区内の学校事務をより充実させていくことです。「まずは西都市から」を目標に頑張っていきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

三真の轍(わだち)

清新の雲・坂の上の雲

♪ああ**清新の雲**高く南の空のかぐわしき…。私事となろうが41年振りに母校の校歌を唄う機会を得たことは教師として感慨深いものがある。同時に、同窓生や先輩諸氏から届く叱咤激励に、背筋の伸びる思いもしている▼妻中の校訓は、開校から変わることなく校歌に謳われている三つの教え「**真実を求め、真実を語り、真実を行う**」であり、そのかざす道は七十余年の間まどいなく、ゆるぎもない。本校の生徒たちはこの教えを「三真(さんしん)」と呼び、それを生徒活動の中でも意識してくれている。この姿勢は、他校に類を見ない本校の誇るべき宝であろう。校長の私もそれに倣(なら)うべく、本書タイトルを「三真」、本コラムについても、三真の精神で活躍する学校の姿を綴(つづ)るという意味を込め「三真の轍※」と銘打った。三年後に再編・統合を控えるこの節目の本校の姿を、校内外の方々にお伝えしていくことも自分の責務であると感じている▼本校の生徒たちは実に素直で前向きであり、生徒会を中心に、生徒が主体となって学校行事を運営する姿に満ちあふれている。行事の企画・運営はもちろん、式典の会場設営なども生徒主体で行う学校は珍しい。明朗で生き生きと活動し、学校を盛り上げていこうとする姿は、まさに清々(すがすが)しく澱(よど)みのない「清新の雲」そのものである▼作家の司馬遼太郎氏は、明治後期における国家の著しい発展や若者が飛躍する姿を「坂の上の雲」と名付け、同著作の中でその高揚感を、文壇の雄・正岡子規や日露戦争で活躍した秋山好古(よしふる)・真之(さねゆき)兄弟の姿に投影した。本校の生徒たちが妻中で繰り広げる「清新の雲」も、いつの日か令和の激変社会における「坂の上の雲」となるよう期待して止まない妻中生との出会いとなりました。これからどうぞよろしくお願い致します。

（校長　伊東泰彦）

※「轍」については、本校５０周年の記念誌名「轍」から拝借させていただきました。